墨画

西村幸子

五月書房

著者略歴
西村　幸子
1930年兵庫県に生まる。
県立八鹿農蚕学校女子部卒業。
大阪文学学校23期生。
同人雑誌『航跡』主宰。
著書　短篇小説集「子守唄」
住所　大阪市西淀川区柏里町1—130—1

墨画　定価　八七〇円

昭和四十八年三月二十日　発行
著者　西村幸子
発行者　竹森久次
発行所　五月書房
東京都千代田区三崎町二—八—二
電話（二六二）四四九〇
振替東京　三三九四三
郵便番号　一〇一番

0093—11166—2409

墨

画

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

(一)

サンマの塩焼を皿に移して、あとは焼茄子をつくるつもり。茄子が安い日で笊にはいつもより多いめに買ってきた艶やかな茄子。電話のベルが鳴っている。この家の主婦は一旦手にとった茄子を笊に戻してガスの火を止め、台所の続きの三帖の障子を開ける。

電話の向こうで無気力な明夫の声。近頃再燃した女のところに泊るのだろう、今夜は帰らないという。はっきりしない言葉遣い。夫からの電話を受けると康子はいつも胸の奥のほうに、つわりに似た重苦しさを自覚する。しかし康子はすぐ心をなだめ立直るのだ。

……とすると焼茄子は二人分でいいということか。調理台にある三皿分のサンマの塩焼をチラと見て康子はひとりうなずく。玄関でドアの軋む音。哲夫が帰ったようである。

「サンマを焼いているのだね。いい匂いがする」

元気いっぱい哲夫の声がして、康子は救われたように表情を変える。明るくまるで恋人を迎えるときのように。

「おかえりなさい。今日は暑かったでしょう。すぐ食事にするそれとも風呂にいく」

言葉をかわしながら母と子はカバンを受け渡して、もつれるように二階への階段を上がっていく。姉のるみ子が結婚してからは二部屋を占領し、優雅な生活になったと機嫌のいい哲夫。一部屋を勉強専門に使えることが嬉しくてならない様子。

康子は手に持ったカバンを机の上にヨイショと掛声をかけて置く。見上げるばかりの大男に育ったわが子に甘えの混った口調で、

「お父さんは帰れないんですって。会社の用事で遅くなるっていま電話があったところよ。さ、お腹すいたでしょ。すぐ食事にしましょうよ」

哲夫は寝室に使っている方の押入れから替ズボンを取り出しはきかえている。

「なんだってこのところ泊りが多いんだろう。ほんとうに会社がいそがしいのかなあ。お母さん、ちゃんと確めたのかい」不服そうに哲夫がいう。一瞬ドキッとする胸を押し静めて、

「いくらいっても帰れないときは帰れないのよ。会社の用事だっていうのだから仕方がないわ」

康子は哲夫に背を向ける。先に立って階段を降りていく。台所で大根おろしのすり残しを手早く片付ける。話しが途切れると康子は淋しい。るみ子が相手だったときのような話題を男の哲夫に向ける。

「サンマ一匹がなんと百円よ。高いわねえ。高いけど一度や二度くらい食べておきたい魚だもの。無理にでも買いたい気持ちになるわ。なんといっても秋はサンマ、松茸、梨、栗、柿の季節ですもの」

そういいながら康子は、サンマはまだしも松茸などこの秋も食べられまいと思う。とても買えないわ、一本が千円近くもする高価な秋。

「お父さんは馬鹿だね。お母さんがこうやって秋を演出しているっていうのに。そんなに多い給料でもないのに泊りこんで仕事をやることはないんだ……」

「いいのよ哲夫。まだ一度や二度買うつもりだもの。今夜のお父さんのぶん、あなたがおあがりなさいよ」

炊飯器から御飯をよそって哲夫の手に渡してやりながら、康子は明るくいう。

「早く新米が食べたいわねえ。まだ売ってないけれど出回るようになったら一番に買ってくるわ。貧乏だけどお米なんかそんなに食べるもんじゃないし、高くてもおいしいお米を少しずつ

買って、おかずだって無駄にならないだけの量を買うように心掛ければ、結構安くおいしい食事ができるわ。これぐらいが私の腕の見せどころってところかな……」

いつものロぐせである。哲夫は笑って聞いている。るみ子が家にいたときはるみ子を相手に康子はよくしゃべった。哲夫が相手だと少しばかり勝手が違う。哲夫はうなずきながら神経はサンマの方にいっている。器用に骨を抜き終えるとそれでも母親へのいたわりを表現する気か、

「そのうち僕が大学を卒業して就職したら、サンマなんか毎日でも食べさせてあげるよ」

自信をこめていう。

「あらうれしいわ。サンマもだけど松茸飯も食べたい」

「いいさ。何だって好きな物をうんと食べさせてあげるよ」

康子はうれしそうに笑う。頼もしい息子。姉のるみ子が結婚したあとは今まで以上に母想いの心遣いをみせる哲夫だ。言葉のはしばしにそれが感じられる。茄子と若布の味噌汁を哲夫は二杯おかわりした。食事が済むと哲夫はさっと立つ。

「バイトに行ってくるよ。僕はお父さんと違って遅くなっても必ず帰ってくるから心配しないで。なにしろ僕はこの家以外に泊めて貰うところはないんだからね」

何気なく言った哲夫。康子の胸を突く言葉だ。〈知っているのだろうか。父親に政子という

女のいる事実を。まさか……〉出かける哲夫の背中に向かって、「いってらっしゃい」と声をかける康子。

親想いのいい子だわ。それだけのことだ。貧乏でなければアルバイトさせなくていいのに。康子は台所に立ってしばらく物思い。やがて思い直して後片付けにとりかかる。見渡せば一目でありかがわかる殺伐とした家。合理的といえばいえるだろう。茶わんでも鍋でも余分は置かない主義である。というより多くを買うゆとりがないのだ。なにもかも最少限で間に合わせている。すっきりと清潔な感じがこの家を訪れる人の印象にあるのは、余分な物が視線をさえぎらないからのようである。康子は湯呑が一つ割れると一つ買い足す主義である。気質としては米を買う場合と同様に、なるべく質のいい品物をと心がけている女だ。

ひとりで鏡に向き合う康子。頬のシミを撫ぜている。ひとりごと。「上等のパックをしてみたい……」シミと地肌の差に泣きたい思い。何とかならないだろうかこのシミ。眺めているだけではどうにもならないのだ。いつもの通りあきらめて化粧水を叩きつけ、クリームを塗りこむ。軽くマッサージ。しかし手に力が入らない。ファンディションは塗らない。シミは毎朝出勤前に時間をかけて消すのである。夜ぐらいは休ませてやらなければ。

哲夫を待つ康子の夜は何をしても虚ろでなにをやっていても長い時間に感じられる。

スーパーマーケットの控え室にいる康子。同僚と朝の挨拶をかわしたあと店長を捜す。康子の仕事は店頭で果物を売る係である。お仕着せの上衣に着替えて点呼を待つ間に、彼女は店長から昼休みの時間延長の許可を得なければならない。店長の姿を見とめると康子は素早く駈け寄っていった。

数日前のことである。康子の住む文化住宅の斜め前の三好さんの奥さんが病院で亡くなった。葬式の手伝いにいった康子は三好氏に愛人があること、死んだ奥さんに保険がかけてあったことなどを井戸端会議さながらの喧噪の中で聞いた。康子は何を考えていたのだろう。それからの数日、その話が頭にこびりついていたのだ。三好夫人については康子は他人に口外していないが嫌な思い出があった。夫人が妊娠していて出産間近かになって死亡する不幸の原因は妊娠中毒ということであった。不規則な生活の状態の一部を康子も知っている。彼女はある日息を切らせて康子の家に飛びこんできた。

「奥さん、天の恵みだわ。助けだわ。こんな有難いことが私に起こるなんて何という幸運でしょう」

道行コートを着た三好夫人の腹部は肩で息をするたびに重々しく上下した。彼女はかなり急

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

いできた様子であった。
「どうなさったの。何か大変なことでもあったの」
康子は土曜の午後で家にいて、これから市場に行こうと思っていた矢先のことだ。突然の三好夫人、そしてただならない様子。
「奥さん、まあ聞いて。すごい幸運……」
彼女は手提げ袋を両手でしっかり握りしめていたが、やおら袋の口を開け中から財布を取りだした。ロウケツ染の折り畳み財布である。グリーン色のその財布を康子の手に押しつけるようににじみ寄り、
「ちょっと見てこの財布、中に二万円もそれ以上も入っているのよ。まったく天の恵みとしか思われないわ。なんという私はしあわせ者かしら。私がお金に困っているのを神さまはちゃんと知っていらっしゃったのだわ……」
有頂天ぎみの三好夫人は財布を握りしめて小きざみに身体を震わせる。康子は何事かと一瞬思案したほどだ。がすぐ三好夫人のおしゃべりで全容が理解できた。三好夫人はこのところ健康がすぐれないこともあって、すすめられて神社に参る気持ちになったらしい。もともと信心するほどの殊勝な心がけはないのだが、背に腹はかえられずといったところからのようである。

三好氏が外泊ぎみで、夫人は派手好きも手伝って生活費にことかく有様だった。編物の技術はあるのだが、妊娠してからは働くのがおっくうになったと仕事をほとんどしていない。今日は一度騙されたと思って神さまに健康のこと生活の保障のことを頼んでみようと西宮の神社にいった。すると眼前の石畳に財布が落ちているではないか。夫人は驚いて周囲を見廻した。人影はなかった。どうして財布を拾いあげ、手提げ袋の中に入れたかその辺のことが思い出せないほど取り乱し、彼女は神社の前からタクシーを拾いいまそこで車を降りたようである。露地を走り抜けてきた彼女は長距離を走りぬいた走者ほどに息を切らせているのだ。康子は二の口がきけなかった。いま彼女にどういってやればよいのか。〈あなたの行為はせっ盗よ。すぐ財布を警察に届けるべきだわ〉だが康子は口にはしなかった。

「奥さん、神さまの霊験ってほんとうにあるのね。こんなこと私はじめてだわ。これでしばらく生活費のこと心配しなくてすむわ」

単純。浅はか。三好夫人は自分の行為の不純さを少しも疑ってみようとしない。落した、あるいは置き忘れた人の気持ちを思いやってみようとしない。神さまを信心しようとした自分を賞でて与えられた褒美ぐらいに思っているのだ。康子の戸惑った表情。三好夫人はようやく気がついたようだ。

「奥さん、悪いことかしら。この財布私が貰っておくのは……」
「さあ……」康子は言葉をにごす。
「奥さん、私、まるっきりお金がなかったのよ。昨日奥さんから借りた五百円の残りで電車賃を払って神社にいったんですもの。畑さんの奥さんから聞いた神さまは遠いし、電車賃は足りないし、それで近くの西宮の神さまにしたんだけれど、神さまならどこの神さまも一緒なのよ。今度ではっきり知ったわ」
三好夫人は同じ棟に住む畑さんに神さま参りをすすめられたいきさつを話した。康子はだまっていた。確かに三好夫人は金に困っていた。三好氏が愛人と同棲して給料を持って帰らなくなったからだ。それに比べると康子は自分たちの夫婦のありかたは異常かもしれないがまだずっとましだと思う。
「奥さん、こういうめったにない幸運を私だけで一人占めにすると罰が当たるわ。奥さんにもおすそわけしなくっちゃ」
あっと驚く康子を尻目に三好夫人はいそいそと財布を開けた。一万円札が一枚、五千円札が一枚、千円が六枚、あと小銭が少々。そのうちから五千円札を抜きだし康子の手に握らせようとする。

「さあ受けとって頂だい。困ったときはお互いさまだもの」
三好夫人はそういって、こわばった顔に無理やり笑顔をつくった。康子はあわてていた。あわてて五千円札を三好夫人に押しかえした。二人の女の間で一枚の紙切れをやりとりするようにしばらく揉み合いが続いた。
「私、いくら困っていても人様のお金なんか欲しくはないわ。お金は働いて得るものだもの。このお金は受けとれないわ」
「でも、私ひとりで全部貰っちゃう訳にはいかないわ。それに誰かに感づかれたとき、私ひとりだと何だか怖いんだもの。お願いだから二人で分けましょうよ」
康子は頑固に断わった。それで三好夫人はやっとあきらめたようである。どうすればいいのと康子に訴えるように幾度もいったあと、決心したように財布から現金を全部抜きだして自分の財布に移した。康子はその行為を全部見ていた。確かに三好夫人からせっ盗の分け前はとらなかったが同罪ではないかという思いがチラとした。一方この場合、三好夫人にとってはこの金はなくてはならない金なのだ……せっ盗に類似する行為には違いないが盗んだのとは違う。拾得物は警察に届けなければならない義務があるが、落し主が現われなければ六ヵ月と十四日たてば拾得者のものになる。しかし落し主が現われるかも知れない。どうしても欲しい金に違い

ない……。〈私は知らないわ。何があっても知らないわ〉事の善悪を論じるよりも康子は現実に眼を瞑ったほうが気楽な気がした。三好夫人は「悪いわね。私ひとりで全部貰うなんて申し訳がないみたい……」そういいながら空になった財布を康子の家のゴミ箱に捨てて帰っていった。

あれから二ヵ月もしないというのに、三好夫人の死は実にあっけなかった。あればあるだけ使ってしまう性分の女だったから、あの金も数日を待たず消費したものであろう。そのことはかなり強烈な思い出となって康子の中に残っている。どこか後味の悪さを残して。

三好氏は妻君が死ぬとすぐ家に帰ってきて、葬式などテキパキとやり、あまり悲しんだ様子もなく二、三日前から会社かどこかに出かけている。早い話では家主に家を明渡すといっているという。

康子は休憩になると交替もそこそこに上衣を脱ぎマーケットを出た。知人の勤め先の生命保険会社にいくのである。そこはターミナルをはずれた新興地にある駅前の営業所であった。奥田広子という康子の知人は、以前天六の文化住宅に住んでいたときの隣人である。玄関まで出迎えた奥田広子に、康子はバックからパフを取りだして注意深く汗を押えながら、

「いそいできたものだから……」

といい訳をする。

「時間がないのですぐ契約をお願いね……」

「ええ、わかっていますわ。すぐ書類にサインして頂きますから」

営業所には事務員が二人と所長がいた。広子が所長を康子に紹介した。二人で机に向き合うと康子は早口でいった。

「電話でお願いしたように、主人には内緒にして下さいね。掛け金はどうせ私の給料から払込むのだし、知られてどうということはないんだけど、何となく生命保険はいいだしにくくて……」

「解っていますよ。村井さんのご主人に限らず誰だって自分に保険かけるのは嫌なものらしいですからね。でも安心して契約して下さいな。何も悪いことではないのですから。魔よけの気持ちでいらっしゃればいいんですよ」

契約申込書の被保険者の個所に、村井明夫と書きながら康子の胸は少しだけ傷む。

「もう一度念を押しますけれど主人が慢性の肝臓を患っていることは、あくまで伏せておいて下さいね」

哀願の表情を広子に向ける康子。既往症だの現在治療中の病名だの記入する告知書が眼の前

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com